

## 現代を生きる

— 「物」から「者」に伝えるもの—

潘 蕾\*

### はじめに

令和元（2019）年6月21日、スタジオジブリの宮崎駿監督の作品『千と千尋の神隠し』が中国で上映され、興行収入が4.88319億元に達した<sup>1</sup>。日本での公開から18年の歳月を経ての公開でもこれほどの成績を収めたことは中国国内の映画ファンの宮崎駿監督作品に対する熱愛を物語っている<sup>2</sup>。これに対し、スタジオジブリの共同創設者で、2018年にこの世を旅立った高畑勲監督の作品の中国国内における認知度は遥かに宮崎監督の作品には及ばない。

高畑勲監督の代表作として、『火垂るの墓』（1988年公開）、『おもいでぼろぼろ』（1991年公開）、『平成狸合戦ぽんぽこ』（1994年公開）、『ホーホケキョ となりの山田くん』（1999年公開）、『かぐや姫の物語』（2013年公開）などが挙げられるが、作品の舞台が常に日本に設定され、現実の社会問題と向き合う傾向が強い。両監督の作品について、日本の映像研究家の叶精二氏は、宮崎演出の即効性の感覚直撃型に比して、高畑演出は遅効性の感覚浸透型であり、宮崎作品は完成された別世界へと観客を誘うが、高畑作品では現実へ還るようにと背中を押されると評した<sup>3</sup>。それゆえ、高畑監督の作品を観た後、気分がしばらく晴れない観客も多い。

平成六（1994）年7月16日に公開された『平成狸合戦ぽんぽこ』には、開発が進む昭和40年代

の多摩ニュータウンを舞台に、そこに住む狸たちが伝統的な化学を駆使して開発による自然破壊を食い止めようとして人間たちに立ち向かう姿が、キュートかつユーモラスに描かれている。高畑監督がこの作品を実在の狸を追いかけた「ドキュメンタリー」であると自ら銘打ったように、狸たちの生態と奮闘ぶりを描くために、監督は都市近郊の狸事情を徹底調査したのみならず、日本の伝承、文学、絵画、歌謡などを大いに活用し、人間に翻弄されながら伝統と現代の日本をさまよう狸たちの姿を活写したのである。

本稿では、『平成狸合戦ぽんぽこ』の制作に際して高畑監督が日本のいかなる伝承、文学、絵画、歌謡などをいかに活用したのかを考察することにより、狸が作品の主役になるゆえんを分析し、作品の内容及びタイトルに込められた監督からのメッセージを掘り下げてみる。さらに、映画公開当時の日本と同じような課題を抱えている今日の中国にとって、この映画をいかに見つめ直すべきなのかも考えてみたい。なお、画面及びセリフの確認のために、映画のほかに、『超天然色漫画映画 平成狸合戦ぽんぽこ』（高畑勲・百瀬義行・大塚伸治、徳間書店、2001年）を合わせて参考にした。

### 一、『平成狸合戦ぽんぽこ』について

『平成狸合戦ぽんぽこ』について、宮崎駿監督と高畑勲監督という二人の巨匠の間に立ってスタジオジブリの代表取締役プロデューサーとして活

\*北京外国語大学准教授

躍する鈴木敏夫氏は、『天才の思考 高畑勲と宮崎駿』という著書の中でその制作過程を振り返っていた。鈴木氏によれば、宮崎監督が自分の『紅の豚』（1992年7月18日公開）に対する作品として高畑監督が「狸」の作品を作らないかと言い出したが、このことは高畑監督がかつて「日本固有の動物として、狸にまつわる話というのはおもしろいものが数多くあります。誰かが映画にすべきじゃないでしょうか」と言っていたことをも背景にしている<sup>4</sup>。テーマ検討の段階において、高畑監督と鈴木プロデューサーは、「古今東西、狸を扱ったあらゆる話を全部詰め込んである」小説『腹鼓記』の作者井上ひさし氏に会ってストーリーについて意見交換を行い、さらに井上ひさし氏所有の「遅筆堂文庫」に赴いてそこに設けられている狸のコーナーで資料収集をもした<sup>5</sup>。「狸」からスタートした企画であるが、高畑監督はそこに山を切り崩して作った現実の住宅地「多摩ニュータウン」を加え、「自然」を映画のテーマにすることを提案した。しかも、擬人化するものではなく、狸が狸として登場させるという架空のドキュメンタリーとして狸を描こうとした。それゆえ、シナリオの作成に際し、高畑監督は狸の生態観察を行い、狸の研究者や多摩ニュータウンの開発についての取材などを徹底したのである<sup>6</sup>。

1992年8月17日から1994年6月13日までという二年近くの制作期間を経て完成した『平成狸合戦ぽんぽこ』は、上映時間118分59秒01コマの長編アニメーション映画となり、1994年7月16日（土）に公開され、第一次興行で観客動員数が313万7740人に達し（70日間）、1994年度興行収入邦画第一位を記録した<sup>7</sup>。第49回毎日映画コンクールアニメーション映画賞、第12回ゴールデングロス賞・マネーメイキング監督賞・予告編コンクール賞、アヌシー国際アニメーション映画祭長編部門グランプリなど国内外において数多くの賞を獲得した<sup>8</sup>この作品は、日本の国民的な映画として日本人に親しまれ、数年に1度日本テレビの『金

曜ロードSHOW!』枠に登場し、今まで計9回放送されている。平成30（2019）年4月、『金曜ロードSHOW!』は「さよなら平成2週連続スタジオジブリ」と題する企画において、高畑監督の命日にあたる4月5日（金）にタイトルに「平成」がつくこの作品を放送したのである。

タイトルに「平成」がつきながらも、この作品の舞台となるのは、昭和40年代の多摩ニュータウンである。多摩ニュータウンは、新住宅市街地開発事業により、東京都南部の多摩丘陵を中心に開発が進められ、昭和45（1970）年より住宅建設に着手し、昭和46（1971）年に入居を開始し、以降段階的に整備・入居が行われている。その基本方針としては、優れた自然環境と調和した良好な居住環境を備えた住機能の充実と、教育、文化、業務、商業の機能を備えた活力ある新市街地の形成を図るものとしている。また、この映画の主役となるのは、ほかでもなく「狸」である。

## 二、描かれる「狸」

前述したように、狸たちの生態と奮闘ぶりを描くために、高畑監督は都市近郊の狸事情を徹底調査したのみならず、日本の伝承・文学・絵画・歌謡などを大いに活用した。それゆえ、完成された作品は「ちゃんこ鍋映画」とも称されている。そこに描かれる狸は、単に昭和40年代の東京に棲む「動物」だけではなく、日本の伝統文化を受け継ぐ「文物」にもなっていると言えよう。ここでは、まずこの映画において、狸がいかに描かれているのかについて見ていきたい。

### 1. 習性と性格

#### ①四足歩行・走行

この映画には狸たちが人間のように直立二本足歩行の姿で登場することが圧倒的に多い。とは言え、実在の生態をなぞって四足歩行・走行のシーンも描かれている。例えば、冒頭の狸内部の合戦

において、狸たちが四足で走りながら突然立ち上がって二足で走り続ける<sup>9</sup>場面がある。前半の狸本来の習性に基づく四足走行という描写は、映画の主役となる狸は擬人化するものではなく、動物そのものであることを観客に認識させる狙いがあると思われる。

### ②臆病者

狸の性格をありありと描くシーンとして、東京に棲む狸たちが伝統的な化学を復興するために、狸世界の先進地である四国と佐渡から有力な変化狸を招聘することを決めてその使者を選出することになるが、全員が「たぬき寝入り」をしたところ<sup>10</sup>が挙げられる。「たぬき寝入り」は寝たふりをするという意味のことわざであり、狩猟の際、猟師が猟銃を撃った時にその銃声に驚いて狸は弾がかすりもしていないにもかかわらず気絶してしまい、猟師が獲物をしとめたと思って持ち去ろうと油断すると、狸は息を吹き返してそのまま逃げ去っていくという狸の非常に臆病な性格からきていると思われる。住み慣れたふるさとを離れ、長距離の危険の伴う旅に出るという使者の務めに対し、狸たちは全員寝たふりをして沈黙を通して拒絶していた。しかし、この沈黙はすぐさま火の玉のおろくが持ってきたマクドナルドのハンバーガーによって破られた。においに誘われて狸たちは目を開きハンバーガーの入る袋に殺到した<sup>11</sup>。この前後の対比により、狸の「臆病者」の性格が一層鮮やかになったのである。

### ③ずる賢い

上記の「たぬき寝入り」の場面も示している通り、実際寝ていないにもかかわらず、寝ているかのようなふりをしてまわりを騙そうとした狸たちの性格には「ずるい」一面もある。

無事に四国から有力三狸を招請できた狸たちは、人間の心に狸に対する尊敬と畏怖の念を取り戻してもらうために、ぼんぼこ33年暮れに「妖怪大作戦」を敢行し、多摩ニュータウンの人々を驚かせた。しかし、大勝利を確信して飲んだり歌ったり

して祝う狸たちの目の前に映ったのは、テレビが放送するワンダーランド社長の緊急記者会見であった。社長によれば、建設中のワンダーランドの素晴らしさを知っていただくために、先日の大パレードを無料で奉仕したという<sup>12</sup>。実際何もやっていないにもかかわらず、目先の利益のために堂々と自分がやったと宣言する社長は実にずる賢く、「狸親父」と呼ぶのにふさわしい者である。「狸親父」や「狸爺」は、狸の習性に基づき<sup>13</sup>、経験を積んでずる賢くなった老年男性を言う言葉であるが、徳川家康も方広寺鐘銘事件によって「狸親父」と揶揄されることがある。映画の中で動物の狸たちがテレビを通じて人間の「狸親父」の「演技」を鑑賞するという描写は、何よりの風刺となろう。ワンダーランド社長の仕業に対し、四国から招請された有力狸の一狸である六代目金長は、復讐を画策して社長から1億円を奪い取り、狸たちの闘争資金にした<sup>14</sup>。今回の対戦において、人間の狸親父は到底本物の狸親父には勝つことはできなかったのである。

## 2. 特技

### ①化学・変化

科学の発達した人間に対抗するために、狸たちは先祖伝来の化学を復興させて人間研究をするという五ヵ年計画を立てた。ここで言う「化学」は物質の構造・性質及び物質相互の反応を研究するという自然科学の一部門となる化学ではなく、物や者に化ける変化術のことである。映画のポスターにも描かれている通り、日本古来の変化術に長ける動物として、狸、狐と一部の猫が挙げられるが、「狐七化け狸八化け」ということわざから、狐よりも狸のほうが化ける腕が一段上であると俗に言われているとうかがえる。映画においても、特訓を経た狸たちは茶釜からだるま、お地蔵さん、招き猫、人間まで次々と変身を遂げていき、自在に変化術を操っていたと言えよう。

## ②腹鼓を鳴らす

化学のほかに、腹を鼓代わりにして打ち鳴らすことも得意である。日本では深夜になると、どこからともなく聞こえてくる笛や太鼓などの祭り囃子の音を俗に狸の打つ腹鼓であるという。童謡「証城寺の狸囃子」も、詩人で童謡作詞家の野口雨情が千葉県木更津市を訪れた際市内の證誠寺に伝わる狸囃子の伝説を題材に作ったものである。狸のこの特技に基づき、映画のタイトルに鼓などを打つ音を表す「ぼんぼこ」という語が使われたのである。

## ③巨大な陰囊（金玉）を操る

映画において、105歳の古狸・鶴亀和尚が雄狸を対象に特別講義を行った。鶴亀和尚は自らの金玉を広げて八畳の畳にして雄狸たちに座らせた<sup>15</sup>。後に権太たちが機動隊と戦う際にも巨大な金玉を傘にして飛んでいた<sup>16</sup>。狸のこうした特技は江戸時代の浮世絵にも描かれており、例えば、江戸時代末期の浮世絵師・歌川国芳（1798～1861）の作品「狸の夕立」においても、突然降ってきた夕立に慌てて金玉を巨大な傘のかわりにさす狸たちが登場している。

## 3. 著名狸

映画に描かれているように、日本の狸の世界において、先進地とされるのは四国と佐渡である。招請された有名な変化狸の三狸はいずれも四国の由緒ある家柄の出身である。

## ①阿波六代目金長

阿波六代目金長は、徳島県小松島市にある金長大明神の主であり、江戸時代末期の阿波国（後の徳島県）で起きたという「阿波狸合戦」の伝説に由来している。「阿波狸合戦」の伝説は四国にある数多くの狸伝説の中でも特によく知られているものであり、昭和初期に『阿波狸合戦』（1939年公開）と『続阿波狸合戦』（1940年公開）と映画化されて人気を博したのである。

## ②屋島太三郎禿

屋島太三郎禿は、源平の屋島合戦をこの目で見たとという誉れ高い長老狸であり、香川県高松市屋島に伝わる「屋島の禿」の伝説に由来している。伝説によれば、平安時代末期に太三郎狸という狸が矢傷で死にかけたところを平重盛に助けられたため、恩義から平家の守護を誓った。平家が滅亡した後、屋島を本拠とし、年に一度変化術を使って源平の屋島合戦の様子をみせ、屋島寺にある菘山大明神に祀られるようになったという。映画においては、999歳の誕生日を迎えた屋島太三郎禿は多摩ニュータウンの狸たちの要望に答え、若き日に見た源氏方の那須与一が平氏方の軍船に掲げられた扇の的を見事に射抜くという名場面を再現した<sup>17</sup>のである。

## ③伊予隠神刑部

伊予隠神刑部は、愛媛県松山市の狸で八百八狸を統率するものであり、江戸時代末期の講談『松山騒動八百八狸物語』に由来している。講談によれば、伊予国（後の愛媛県）松山の狸は第38代天智天皇の時代に端を発するほどの歴史を持ち、狸が狸を生んだ結果、その数は808匹にもなり、その総帥が隠神刑部である。隠神刑部は久万山の古い岩屋に住み、松山城を守護し続け、城の家臣たちから信仰され、四国最高の神通力を持っていた。享保の大飢饉に際して御家騒動が起こると、隠神刑部は謀反側に利用されて一族の没落を招いたが、長年にわたって松山藩を守護してきた功に免じ赦され、里山で村人たちと仲良く暮らし、山口霊神に祀られたという。映画においては、隠神刑部は「妖怪大作戦」で力を使い果たして命を落とした<sup>18</sup>のである。

以上見てきたように、映画の中に登場する狸たちの習性、性格、特技、著名狸は高畑監督の事前調査に基づき、忠実に再現されて芸術に昇華されたものであり、日本の伝統文化に凝縮される狸に関する莫大な情報量がスクリーンに刻まれたのである。

### 三、狸たちにとっての古き良き時代

映画の中で、火の玉のおろくは青年狸たちに向かって、以下のように狸世界の歴史を振り返っていた。

「知ってのとおり、江戸時代はタヌキの全盛時代じゃった。変化は極めて盛んに行われ、絵描きや文筆家はこぞっておらたちの『化け学』を題材にした。しかし、タヌキは目立ちすぎた。人間の反感をかった。文明開化以来、人間たちはタヌキを大量に捕獲し、毛皮や筆や歯ブラシなどにして、彼らの復讐心を満足させたのじゃ。」<sup>19</sup>

この言葉から、化学を特技にする狸たちにとっての古き良き時代は文明開化以前の時代であるとうかがえよう。したがって、古き良き時代へのオマージュとして、狸たちは「妖怪大作戦」に乗り出し、各時代のさまざまな化け物を現代を生きる多摩ニュータウンの人々の前にさらしたのである。

#### 1. 中世の化け物たち

長い妖怪の行列の中に、傘、草履、琴、琵琶などといった人間によって作られた器物の化け物が少しかわった存在になるが、これらの化け物は大徳寺真珠庵所蔵の室町時代の絵巻『百鬼夜行絵巻』から踊り出たものである。大和絵の絵師土佐光信の筆であると伝承される『百鬼夜行絵巻』はさまざまな化け物が夜中に列をなして出歩くさまを描く作品であるが、そこに器物の化け物が多く描かれるのは、器物にも魂が宿するという「付喪神」思想が色濃く入り込んでいるからである。室町時代に至ると、生産力の画期的な発展により、器物が大量に生産されるようになったが、年を経て徐々に捨てられていく。100年という年月を経た器物には精霊が宿ることから、捨てられた器物の化け物を付喪神と呼ぶようになったのである。

妖怪大作戦においては、草履と傘の化け物が登場するが、草履は藁の甲冑に身を包んでトカゲの馬にまたがっており、傘は紐でようやく縛ってあ

る破れ目からどنگり眼をぱちくりさせ、高下駄を履いて杖をつきながら歩いている。また、琴をひきながら歩む琵琶の化け物も登場し、その傍らには山荒の姿をした浅沓が笑みを浮かべながらのっそり歩いている<sup>20</sup>。

#### 2. 江戸時代の化け物たち

「妖怪大作戦」に最も多く登場したのは江戸時代の化け物たちである。尾形光琳（江戸中期）作の二曲屏風『風神雷神図屏風』に描かれる「風神と雷神」<sup>21</sup>、狩野宴信（江戸中期）作の『百鬼夜行図巻』に描かれる「唐傘小僧」<sup>22</sup>、葛飾北斎（江戸後期）作の『百物語』に描かれる「お岩さん」<sup>23</sup>、歌川国芳（江戸末期）作の『相馬の古内裏』に描かれる「骸骨」<sup>24</sup>など、狸たちの変化術を通じ、江戸時代に活躍した器物・動物・人間の化け物が次々と姿を現したのである。

#### 3. 「妖怪大作戦」の狙いと効果

六代目金長によれば、「妖怪大作戦」の狙いは人間の心に狸に対する尊敬と畏怖の念を取り戻してもらい、その心を翻弄して開発を中止させることにあるという<sup>25</sup>。しかし、多摩ニュータウンの人々の反応から、狸たちの期待するような効果はなかったと言わざるをえない。次々と目の前に浮かんできた化け物に対し、子供と大人の反応は対照的である。子供たちが面白がって見ていたのに対し、晩酌する二人の中年男性を代表とする大人は「人間の神経のせいだ」と繰り返して言っていた<sup>26</sup>。後に「狸親父」のワンダーランド社長に功勞を乗っ取られたのも、人間にとって「妖怪大作戦」はパレードであって一種の娯楽にすぎないことを物語っている。モダンな街づくりにモダンな生活を営む多摩ニュータウンの人々は、すぐさまある夜中に突然姿を現した化け物たちと動物の狸の変化術と関連づけることはできない。

筆者から見れば、「妖怪大作戦」の意義は中世から近世にかけての化け物を一斉に現代を生きる

人々の前にさらしたことにある。というのは、化け物は民間伝承として語り伝えられ、かつては実在するものとして信じられていた。しかし、「神経のせいだ」という言葉にも示されているように、科学技術の発達している今日においては、「化け物」の存在を信じる人が少なくなってきた。かといって、日本の古代・中世・近世・近代の各時代に活躍していた化け物にはそれぞれの時代の人間の物・者に対する考え方が凝縮されている「文物」であり、現代人の心に日本の伝統文化を蘇らせる好資料となる。「妖怪大作戦」を通じて狸たちは自分たちの特技・変化術を駆使してそうした資料を一時的に提示できたのである。

#### 4. 江戸時代の妖怪文化の発達

妖怪研究の第一人者として知られる小松和彦氏は、日本の妖怪を代表するものとして怨霊・付喪神・河童を挙げ、そのうち、怨霊は古代から中世にかけて、付喪神は中世から近世にかけて、河童は近世から近代にかけての時代に特に活躍した妖怪とあって良いであろうという<sup>27</sup>。

古代においては、不可視的な霊が事物に変じたり示現したりしてその存在を示した。中世になると、可視的な事物が霊的なものを獲得したりそれに内在する精霊が異様なものに変じたりしてその存在を示すようになる。怨霊と付喪神のように、古代と中世の妖怪は人間にとってコントロールできない自然の力を象徴するものとして畏怖の対象であった。ところが、近世に入ってから、都市の発展に伴い、人間の自然に対する畏怖の感情が相対的に希薄になり、妖怪は人間の力でコントロールできるものとなっていたのである。そんな中、河童のような「宗教者や技術者がその呪術によって人形に靈魂を吹き込んでつくった『人造人間』」<sup>28</sup>の妖怪が登場するようになったのである。

これを背景に、江戸時代に入ると、人間に自在に操られるようになった妖怪が、大衆を楽しませる文化として都市部を中心に大きく発達したので

ある。前述したように、狸たちは絵描きや文筆家がこぞって狸たちの『化け学』を題材にしていた江戸時代を狸の全盛時代と自慢しているが、実際のところ、人間を楽しませることのできる動物・文物の一つとして、狸たちが取り上げられたのではなかろうか。

#### 四、近現代を生き抜く狸たち

狸世界の歴史を振り返る際、火の玉のおろくは江戸時代に目立ちすぎた狸が人間の反感をかって文明開化以来大量に捕獲されたと言った後、次のように付け加えた。

「皆の衆、おらたちがこの手痛い経験を生かし、変化を慎んできたこの数十年、タヌキにとってもっとも平和な時代が続いたことを忘れてはなりませんぞ。」<sup>29</sup>

火の玉のおろくの言うもっとも平和の時代というのは、人間の価値観に染まって人間同様に生活を送る時代のことである。擬人化するものではないとは言いながらも、映画の中に登場する狸たちは現代日本人ときほど変わらない生活を送っている。ハンバーガーをほおぼったり<sup>30</sup>、缶ビールを堪能したり<sup>31</sup>するばかりでなく、大勢集まってテレビに放送されるプロレスの試合に夢中になる<sup>32</sup>。勝利を祝うために胴上げをし<sup>33</sup>、会議をしながらトランプでババ抜きをする<sup>34</sup>。多摩ニュータウンの狸たちに招請された四国の有力三狸はモダンな服装で東京デビューを果たし<sup>35</sup>、太三郎禿の999歳の誕生日を祝うために巨大なバースデーケーキを用意し<sup>36</sup>、体力の消耗によって目の下に「狸隈」が出ると市販のドリンク剤を飲んで体力の回復をはかる<sup>37</sup>。また、ワンダーランド社長から騙し取った一億円を前にする狸たちの大喜びの様子も生き生きと描いた<sup>38</sup>のである。

## おわりに

映画のポスターに使われる「タヌキだってがんばってるんだよ。」というフレーズに示されているように、開発による自然破壊を食い止めようとして人間たちに立ち向かう狸たちは全力を尽くして戦っていた。しかし、「合戦」を映画のタイトルに使いながらも、その戦い方は温和なものであった。開発現場で働いている人間を奇襲して死傷させるほどの正面衝突<sup>39</sup>はないわけではないが、より多くの場合は「妖怪大作戦」や「田園風景や野山を再現する」<sup>40</sup>といった人間の開発前の日本に対するさまざまな思いを喚起するという戦い方を選んできた。ここから見れば、狸にとっての人間は打倒すべきものではなく、平和的に共生していきたい対象であると言えよう。したがって、狸たちは人間に抗議して自然破壊を阻止するのにがんばっているのみならず、日本の伝統文化の中の重要な「文物」として開発の進展に伴って徐々に消されていく伝統を伝承することにもがんばっているのではなかろうか。

昭和40年代の多摩ニュータウンを舞台としながら、高畑監督は映画のタイトルに「ばかばかしさを感じさせる『平成』という言葉」<sup>41</sup>を付け加えた。筆者から見れば、この映画は伝統と現代をさまよいながら一生懸命に昭和という時代を生き抜いてきた動物の狸たちの姿を活写することを通じ、新たに迎えた平成という時代を生きようとする狸・人間にメッセージを投げかけたのである。そのメッセージとは、映画の中の狸のように戻れない現実を引きずっても意味がなく、これからどう生きていくべきかを真剣に考えるべきだというものであろう。

メッセージを伝える大役を任せられた狸は日本固有の動物であり、前述した通り、日本の伝承、文学、絵画、歌謡などさまざまな文化にその姿を確認することができる。映画にも描かれているが、東京のような大都会にも狸が棲んでいる。明仁天

皇も「皇居におけるタヌキの食性とその季節変動」<sup>42</sup>、「皇居におけるタヌキの食性の長期変動」<sup>43</sup>という二本の研究論文を発表したことがある。このような日本人に親しまれている動物で日本の伝統文化が凝縮されている「文物」の狸を映画の主役に抜擢することにより、映画を見た外国人に日本の伝統と現代を認識させることができる。この意味では、『平成狸合戦ぽんぽこ』という映画は対内的な映画であると同時に、外国人にもいろいろな日本的なメッセージを伝えられる映画であると言えよう。

映画が描いた昭和40年代の多摩ニュータウンは「ニュー」であるこそ、自然が破壊され、伝統が忘れ去られ、狸たちは自然保護と伝統伝承のためにがんばっていた。50年以上の発展を経た今日に至っては、多摩ニュータウンはまた少子高齢化のような新たな課題を抱えるようになった。令和という新しい時代を迎えた日本人にとって、再びこの映画を見ることにより、動物・文物である狸から新たなメッセージを受け取り、現代を生きることについて再思考することができるのではなかろうか。

今日の中国の都市化率は毎年約1%のスピードで上昇しつつあり、中国国家统计局の統計によれば、2019年の都市化率は60.60%に達した<sup>44</sup>。都市それぞれの自然・歴史・文化の特徴を生かして多様化を目指している中国人にとっては、高畑監督の苦心作『平成狸合戦ぽんぽこ』は参考となるところが極めて多いと言えよう。

中国では、この映画のタイトルが『百変狸猫』と訳される場合が多いが、筆者は物足りなさを感じている。というのは、この訳は映画の内容をまとめたとはいえ、映画に込められた物から者へのメッセージを提示しにくいからである。狸たちは確かに変化術を特技とし、それをもって長い間日本人と共生してきた。しかし、変化を追及する一方、伝統というあまり変化しない物をもがんばって継承しようとしている。そればかりでなく、映

画の最後のところに、人間がテレビや何かで「開発が進んでキツネやタヌキが姿を消した」というのに対し、変化できない狸のぼん吉が「たしかにキツネやタヌキは化けて姿を消せるのもいるけど、でもウサギやイタチはどうなんですか？自分で姿を消せます？」と問いかけた<sup>45</sup>という描写があり、変化できない物の生き様をも提起したのである。この意味では、「平成」、「狸合戦」、「ぼん吉」それぞれのキーワードが伝えるものを全部タイトルに込める訳こそいい訳であると筆者が思う。グローバル化が進む今日においては、都市化は閉鎖的、地域的なものではなくなるゆえ、その深化に伴って地域文化の特色及び独自性が失われやすい。グローバル化の中絶え間なく変化を追求する中国人にとっては、『平成狸合戦ぼん吉』は変化できない或いは変化しない物の大切さを意識させる映画となることを期待している。

## 注

- 1 <https://www.endata.com.cn/BoxOffice/MovieStock/movieShow.html?id=462582>。日本円に換算すると、約76.53766億円になる（上映当日のレート：1元≈15.6737円による計算）。なお、同日中国公開のアメリカディズニーの新作アニメーション映画『トイ・ストーリー4』の興行収入は2.00838億円である。<https://www.endata.com.cn/BoxOffice/MovieStock/movieShow.html?id=676662>。日本円に換算すると、約31.47875億円になる。
  - 2 2018年12月18日に中国で上映された宮崎駿監督の1988年の作品『となりのトトロ』の興行収入も1.73736億 円 に 達 した。<https://www.endata.com.cn/BoxOffice/MovieStock/movieShow.html?id=654922>。日本円に換算すると、約28.45987億円になる（上映当日のレート：1元≈16.3811円による計算）。
  - 3 叶精二「新説高畑勲論：「高畑演出」はこうして生まれた」（『別冊COMICBOX／Vol.5『ホーホケキョとなりの山田くん』を読み解く!』99年8月10日/ふゅーじょんぷろだくと発行）
  - 4 鈴木敏夫『天才の思考 高畑勲と宮崎駿』、文藝春秋、2019年、pp.134～135。
  - 5 同上、pp.137～140。
  - 6 同上、pp.140～142。
  - 7 この作品は、高畑作品では最高の興行収入を上
- げ、日本映画製作者連盟のデータによれば、「日本国内歴代ジブリ作品収入ランキング」において第10位となっている。[https://www.weblio.jp/wkpja/content/スタジオジブリ\\_日本国内+歴代ジブリ作品収入ランキング](https://www.weblio.jp/wkpja/content/スタジオジブリ_日本国内+歴代ジブリ作品収入ランキング)。
  - 8 高畑勲・百瀬義行・大塚伸治『超天然色漫画映画 平成狸合戦ぼん吉』、徳間書店、2001年、p.737。
  - 9 同上、p.17を参考。
  - 10 同上、pp.46～48を参考。
  - 11 同上、pp.48～49を参考。
  - 12 同上、pp.520～522を参考。
  - 13 高畑監督は狸の生態調査を通じて「狸というのは小っちゃいところは温厚なのに、ある年齢になると突然凶暴になる」ことが分かった。（鈴木敏夫『天才の思考 高畑勲と宮崎駿』、文藝春秋、2019年、p.142）
  - 14 高畑勲・百瀬義行・大塚伸治『超天然色漫画映画 平成狸合戦ぼん吉』、徳間書店、2001年、pp.590～598を参考。
  - 15 同上、pp.102～104を参考。
  - 16 同上、pp.621～622を参考。
  - 17 同上、pp.421～431を参考。
  - 18 同上、pp.502～506を参考。
  - 19 同上、pp.285～286。
  - 20 同上、p.476を参考。
  - 21 同上、pp.468～469を参考。
  - 22 同上、p.463を参考。
  - 23 同上、p.462を参考。
  - 24 同上、p.493を参考。
  - 25 同上、pp.412～413を参考。
  - 26 同上、pp.482～484を参考。
  - 27 田中貴子・花田清輝・澁澤龍彦・小松和彦『百鬼夜行絵巻をよむ』、河出書房新社、2007年、pp.87～88。
  - 28 同上、p.88。
  - 29 高畑勲・百瀬義行・大塚伸治『超天然色漫画映画 平成狸合戦ぼん吉』、徳間書店、2001年、pp.286～287。
  - 30 同上、p.50を参考。
  - 31 同上、p.171を参考。
  - 32 同上、p.56を参考。
  - 33 同上、p.184を参考。
  - 34 同上、p.338を参考。
  - 35 同上、p.393を参考。
  - 36 同上、p.421を参考。
  - 37 同上、p.114を参考。
  - 38 同上、p.612を参考。



- 39 高畑勲・百瀬義行・大塚伸治『超天然色漫画映画 平成狸合戦ぽんぽこ』、徳間書店、2001年、pp.141～158を参考。
- 40 同上、pp.687～704を参考。
- 41 鈴木敏夫『天才の思考 高畑勲と宮崎駿』、文藝春秋、2019年、p.143。
- 42 酒向貴子・川田伸一郎・手塚牧人・上杉哲郎・明 仁, *Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series A Zoology* 34(2),63-75,2008-06。
- 43 明仁・酒向貴子・手塚牧人・川田伸一郎, *Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series A Zoology* 42(3),143-161,2016-08。
- 44 [http://www.stats.gov.cn/tjsj/zxfb/202002/t20200228\\_1728913.html](http://www.stats.gov.cn/tjsj/zxfb/202002/t20200228_1728913.html)。
- 45 高畑勲・百瀬義行・大塚伸治『超天然色漫画映画 平成狸合戦ぽんぽこ』、徳間書店、2001年、pp.729～730を参考。

#### 参考文献

- 高畑勲・百瀬義行・大塚伸治『超天然色漫画映画 平成狸合戦ぽんぽこ』、徳間書店、2001年
- 田中貴子・花田清輝・澁澤龍彦・小松和彦『百鬼夜行絵巻をよむ』、河出書房新社、2007年
- 湯本豪一『百鬼夜行絵巻 妖怪たちが騒ぎだす』、小学館、2009年
- 小谷野敦『高畑勲の世界』、青土社、2013年
- 金子淳『ニュータウンの社会史』、青弓社、2017年
- 国際日本文化研究センタープロジェクト推進室『動態としての「日本」大衆文化史 キャラクターと世界』、2018年
- 鈴木敏夫『天才の思考 高畑勲と宮崎駿』、文藝春秋、2019年